ま　え　が　き

学校長　矢ケ崎　孝　雄

昨53年８月には新高等学校指導要領が告示され，また本年１月には大学入学試験の共通第一次試験が実施され，さらに９月には新指導要領の移行措置も発表された。わが国の高等学校教育は改革のプロセスにあり，また大学入試の面においても，重大な時期にあるとみられる。こうした状況下で，高等学校教師の研鑽はひとしお重要な要素をなすものであるが，本校がここに「高校教育研究」第31号を発刊する運びとなったことは，まことに意義深いものと思うものである。

本号の研究は，教科教育関係が３件，教科外教育活動に関するもの１件，保健に関するもの１件，それに教育実習関係１件の計６件に及び，実験学校に相応しい研究が集積されている。以下にその概略をみよう。

岩城谷教諭の「必修クラブ活動の実際と今後」は，本校におけるこれまでの研究成果をふまえた昭和52年度の実態を，最良の開花として報告し，ついで同53年度の客観情勢に対応した改善案と実情とを示し，さらに同54年度の活動と今後のあり方にも言及したものである。共通一次試験，新学習指導要領への移行措置などに対応して，必修クラブ活動の問題を解明した貴重な労作といえよう。

つぎに亀田教諭は「視力低下について」研究した。全国的に生徒の近視は問題になっているが，近視者の多い本校生徒の実態を小中高校の課程を通じて追跡調査し，近視と眼の酷使とが一致する点を指摘し，さらにアンケート調査によってその実態を明らかにし，学校側の対応策をも示した入念な研究である。

中原・玉鉾・倉３教諭は「理科教育実習生のための手引き」を共同研究した。これは理科の各教科に共通な部分をまとめたもので，教育実習生にとって極めて懇切な手引きとなると考えられる。教育学部の実験学校としてまことに適切な研究といえよう。

さらに同じ３教諭は「理科Ｉに対する全国の実状について」報告する。すでに「高校教育研究」第30号でも報告された「ストーリー化した総合理科の試み」の一連の研究を，より具体的に実状にマッチするよう，全国的にアンケート調査したものである。その結果では担当者の研修と内容構成のストーリーの出来具合が，焦点となるという指摘が得られた点，重要に思われる。

木村教諭の「技術史からみた世界史――世界史の再編成――」は，ギリシア史の初期について資料集的形式の教材を，生のまま極力公平にまとめたものである。地道で，骨の折れる労作であり，今後の教育・研究面での利用が期待されるものである。

能崎教諭の「東ドイツの数学教科書紹介(3)」は前号よりつづくもので，第12学年の教科書の内容を紹介したものである。

上記のように高等学校教育をとりまく客観情勢は，まことに複雑かつ緊要な課題の累積といえる。さらに本校は実験学校として学部学生を教育実習において，春秋二回指導しており，生徒の進路指導においても懇切な指導を必要としている。本集はかような多忙な勤務のなかで，地道にされた研究の貴重な成果であるとみられる。各位の忌憚のないご意見をいただければ幸甚である。